

## 「高・清フレンドリー古道」域 史跡等の発見経緯と公開の記録

### 同エリア史跡等の生肌を執刀・解剖したのはT-FMOとT・K-Friends、私達です。

標題について、T-FMOとT・K-Friendsの活動を踏まえた初期対応を記述します。

この記録は、「高・清フレンドリー古道」域で発見した史跡（ランドマーク）について、基本情報（発見日や発見者、公表方法など）を整理したものであります。

そもそもの切っ掛けとなった2022(令和4)年6月26日(日)以降、今日2025(令和7)年12月18日(木)までの記録です。

地元や誰かに対しての悪意ではなく、同情忖度や粉飾ではなく、真実を有りがまま（ストレート）に記述しています。  
そして、係る総ての情報を公開しています。

膨大な文字量の「調査報告書」を作成し、外部に発表・報告し、個人のホームページであるものの本件に係る専用サイトをトップに掲載し、SNS等を利用した情報の開示と発信に努めています。個人や仲間内で秘匿している情報は一切ありません。

一般社会（世間一般）においては、学識者による出版物・書籍本への記載や、マスメディアによる報道内容が正当であると無批判に受け入れる傾向が見られ、これは権威バイアス（authority bias）と呼ばれる、また、知識人の評価や肩書きが全体の内容評価に不当に影響を及ぼすハロー効果（halo effect）とも関連する現象があります。これらはいずれも、出所の属性だけで情報の信憑性を判断しやすいという認知的傾向、すなわち、受け手側の鵜呑み傾向・習性として説明され、まさに、先入観として蓄積される知識・情報となります。

しかし、素人の私は、この「高・清フレンドリー古道」領域の地勢・史跡等にはまったくの無知でありました。だから、現地・現場に足を運び、この道に連坦的に点在する丁石や石造物に対しては、真っ白な心で客観的かつ初見の視点から観察を行うことが出来ました、見るもの・確認出来る総ての対象に対して、新鮮な多くの疑問が湧きました、そして、地中に埋没しているものや雑木藪で隠された不可視の遺構にまでも内心から発せられた直観照射を自覚しました。

そのような背景を踏まえた記録であります。

註1；空欄は該当しないことの意味

註2；第一発見者の後続は同行者を表す

註3；件名毎に写真とGPSトラックログを保持

発見年月日 先頭氏名は第一発見者	発見・解説対象の主要史跡 (ランドマーク)	公表手段	
		大沼個人の Facebook	備考（発表会等）
2022(R4)年 6 月 26 日(日)	【これがすべての始まり】		大沼は本道寺から「高清水通り」に初めて入り、ドウダン通り分岐点で折り返して来た。丁石の存在に気付き、一部登山道の藪化に問題意識を覚え、地元と西川町に文書を発送した。
2022(R4)年 8 月 6 日(土) 大沼香・宮林良幸	「高清水小屋」跡		濃い藪地が平たんに見えたのが動機
2022(R4)年 7 月末	T1 起点記念碑	2023 年 3 月 2 日	気付き
2022(R4)年 8 月 15 日(月) 大沼香			碑文刻字を全容解説
2022(R4)年 9 月 10(土) 宮林良幸・大沼香	T6 天空石橋	2022 年 9 月 28 日	従前ルートの安全対策検討中、ケルン積み旧道ルート上に存置を発見
2022(R4)年 9 月 10(土) 大沼香・宮林良幸	T5 九十六丁、墓石×2	〃	雑木と笹竹の濃い藪の中の地中から掘り起こした
2022(R4)年 9 月 14 日(水) 大沼香	T2 祖母神像	2023 年 3 月 2 日	背面に分厚い泥土がこびり付いていた（雪で押されて何回も倒れたからであろう）
2022(R4)年 9 月 14 日(水) 大沼香	T4 柴燈場		古語「柴明場」と知り、祭儀の舞台であろうと全般的な価値付けを図った
2022(R4)年 10 月 13 日(木) 大沼香・宮林良幸	(半体) 地藏菩薩 (?) 像		下半体の存在を確認
2022(R4)年 10 月 20 日(木) 大沼香	「姥」小屋跡地	2023 年 3 月 2 日	人工的削平地の奥に人工的堰止湖を発見
2022(R4)年 11 月 10 日(木) 大沼香（発表者）			本道寺地区集会センターにおいて、月山朝日観光協会長、エコプロ代表、月山頂上小屋管理人、月山ガイド協会、西川町役場職員等と T-FMO の合同会において報告した。

2022(R4)年 11 月 12 日(土) 大沼香	「高清水小屋」跡地界限 鉾山開発痕跡		「高清水小屋」跡の背後地に旧道ルートを発見 烏川源流部の水場を発見 人工開削の道とゲル状鉾物の噴出を発見
2022(R4)月 11 月 26 日(土) 宮林良幸・大沼香	「高清水小屋」跡地界限	2023 年 3 月 2 日	赤茶色鉾泉水溜まり池を発見
大沼香・宮林良幸			四ツ谷川源流部の水場を発見
2023(R5)年 3 月 12 日(日) 大沼香（発表者）			発表会 於西川町交流センター「あいべ」約 120 名 大黒森プロジェクトと T-FMO の共催
2023(R5)年 6 月 19 日(月) 大沼香・阿部剛士	<b>T3 石船の碑文刻字</b>	2023 年 7 月 26 日	重いことから二人で動かして、山側に刻字を発見 碑文刻字を全容解読
2023(R5)年 7 月 31 日(月) 大沼香・阿部剛士	<b>K1</b> 把松稲荷神社		存在を確認
	<b>K2</b> 不動明王碑		
	<b>K3</b> 清川行人小屋前石碑群		
	<b>K4</b> 御所王子社	2023 年 9 月 27 日	
2023(R5)年 9 月 11 日(月) 芳賀竹志（案内）	<b>K6</b> 「月山 湯殿山」追分碑	2023 年 9 月 12 日	真鍋雅彦・阿部剛士・大沼香 大沼が碑文刻字の全容を解読
2023(R5)年 9 月 14 日(木) 堀米晴夫	（半体）地藏菩薩（？）像		山形市内の堀米晴夫氏が上半体を発見し大沼に連絡 外部の方であるが、貴重な発見に当る
2023(R5)年 9 月 23 日(土)～24 日(日) 大沼香・宮林良幸	K3・K4		御所王子社趣意刻字石碑を発見 碑文刻字を全容解読
2023(R5)年 9 月 24 日(日) 大沼香・宮林良幸	<b>K5</b> 来名戸神	2023 年 9 月 25 日	清川行人小屋から追分碑を目指して旧道を破漕ぎして いた時に偶然に発見したもの、墓石は地中から発見
2023(R5)年 9 月 26 日(火) 大沼香（直接対応者）			西川町 HP トップ『西川町デジタルマップ』初回掲載 「高清水通り」を対象 資料提供（T-FMO）、アップ作業（役場職員）

以上を以って、本域に設定したミステリアスポイント（ランドマーク）のT1～T6、および、K1～K6について、  
一通り主要物の全数調査を終えた

2023(R5)年 10 月 8 日(日) 大沼香	体内岩に女性戒名墓石 竹の塚古墳に五輪塔頭部		多数の墓石と供養塔があり、一部の6体を調査
2023(R5)年 10 月 11 日(水) 大沼香・片倉忠幸・松田秀孝	K5 来名戸神		もう一つの墓石を発見
2023(R5)年 11 月 1 日(水) 大沼香・宮林良幸・阿部剛士	秘連古道		烏川不動滝探査途中、雑木林藪の中で偶然に発見
2024 年 1 月 1 日 大沼香			これまでの調査情報大沼のグーグルサイトに公開 <a href="https://sites.google.com/view/ohuma-kaoru/">https://sites.google.com/view/ohuma-kaoru/</a>
2024(R6)年 1 月 28 日(日) 大沼香（発表者）			発表会 於西川町交流センター「あいべ」約 110 名 T・K-Friends
2024(R6)年 2 月 6 日(火) 大沼香（直接対応者）			西川町 HP トップ『西川町デジタルマップ』更新 「高清水通り」 <sup>更新</sup> + 「清川道」 <sup>新規</sup> 資料提供（T・K-Friends）、アップ（役場職員）
2024(R6)年 9 月 4 日(水) 大沼香	女性修行僧墓石		「体内岩」の上部
2024(R6)年 10 月 17 日(木) 大沼香	（半体）地藏菩薩（？）像		下半体の碑文刻字に気付き活字化解読
2024(R6)年 10 月 27 日(日) 大沼香（発表者）			発表会 於鶴岡市朝日南部コミセン 25 名 朝日軍道を復活する会
2024(R6)年 11 月 14 日(木) 大沼香・片倉忠幸	台座、銅板		清川行人小屋前、奥の雑木藪地中から発見 碑文刻字を解読
2025(R7)年 4 月 1 日(火)			大沼香が本域調査報告書公開用として、ホームページ 専用サイトを開設した
2025(R7)年 5 月 30 日(金) 大沼香（発表者）			発表会 於西川町交流センター「あいべ」約 110 名 西村山神社総代会

2025(R7)年 8 月 17 日(日) 高橋昌一・大沼香	不動明王碑隣接墓石		倒伏していたものを発見 碑文刻字を全容解読
2025(R7)年 10 月 9(木) 大沼香	烏川観音滝		烏川行人小屋跡東の柳木沢上流
2025(R7)年 12 月 7 日(日) 大沼香（発表者）／T・K－Friends			発表会 山形市城西町「ファーラ」約 40 名 山形大学月山マイスター

もしも、上記本表記載の初回発見日より先に、その史跡内容（造立の経緯等）が分かっていた、石造物の碑文刻字を活字化解読の上で、私達の考察を超える高レベルの論考を張っていたというのであれば、その根拠となる日付を含めた客観的な資料（書付、文書）をご提示ください。伝承を聞いていたとか、あるいは、俺はこう思っていたとかの個人的口頭説明では客観性がなく、理解・納得し難いのでその存在を認めることはできかねます。

なぜこんなことを言うのかとなれば、従前、本域に立ち入っていた人は極少数で限られていたこと、その中でも本域史跡に着目していた人は皆無同然であったと断定できるからです。ことの発端となった 2022(令和4)年 6 月 26 日(日)以降の本域史跡等調査活動に係る地元を含めた仲間の動きの総ては上記一覧表の記録とおりであります、また、本件情報の着実な広がり、T-FMO と T・K－Friends 仲間や協力者の地道な取り組みのお陰であります。

まずは、登山道整備と相まって魅力の発掘と発信（資金を投入した広告は一切行っていない。）に努力している地元の仲間達に対し労苦のねぎらいをお願いしたいものです。

とりわけ、学識者や月山マイスターの方々におかれては、このような経緯・現状を認知されて、地元（人財）を育成する観点からの寛容性と度量を持って応援・支援する姿勢を期待しております。

本件情報の拡散が奏功し、稀有な登山愛好者が確かめに現地に行き、Facebook 等の SNS に投稿しております。地元の人によると、口之宮湯殿山神社の駐車場に車を置いて、明らかに高清水通りに入る登山者が多くなったということです。

私が知っている方で、私達の取り組みを理解してくれたお二人を特記しておきます。

例えば、山形市内在住の堀米晴夫さん（三角点探査の山形県内第一人者）は、大沼が 2023 年 9 月 12 日(火)Facebook に投稿した処、さっそく二日後の 9 月 14 日(木)には行動され、「天空石橋」と「追分碑」の現地に行って来たと翌 15 日（金）にコメントしてくれたのです。

また、仙台市の佐藤敏博さんは、2024 年 10 月 12 日(土)～13 日(日)、仲間と共に現地に行って両者を確認し、YamaReco に投稿してくれたのです。

本当にありがたいことです。

多くの人達からこのような不思議な史跡に巡り合って思索を深めつつ楽しんで貰いたいものです。これが私達の真意であります。

獲得情報の知識をひけらかす、秘匿し、以って書籍本に入れて営利目的の販売に供するということはやりません。



## 地元有志の「高清水通りに対する」当時の認識をひも解く

右下図は1983(昭和58)年9月、高清水通りを本道寺から月山へ登り湯殿山へと下った、その時に記者が同行取材した山形新聞報道(夕刊2面)、大きな紙面で3日間(9/9金、9/10土、6/12月)に亘り報道された。同図は地元の人がその新聞切り抜きと写真を合わせてパネル化したものである。

当時の西川町役場職員と地元本道寺の人達6名は白衣に宝冠！この姿はただごとではない、「生まれ変わる」という決意を天下に誓った印である。(果たしてどのように変わったのか。)皆さんは大変誇らしげである。6名は地域の知識人たる知性と教養の持ち主であり、「高清水通りのことは俺が一番知っている、俺は全てを分っている」と自負・自認する立派な人達であろう。同行記者はその6名のレクチャーを受けて記事にしたのであろう。

大沼はその記事をめくり、つぶさに目を通して見た。この3回に渡る記事の中で、「高清水通りにおける史跡に触れた処」は、9月9日(金)付け記事、下表のとおりの丁石に係る1個所のみであり、他の記事は全般的なことである。

「草に埋まる石道標・・途中『十三丁』とか、『二十六丁』とか彫られた大石<sup>??</sup>が置いてある。この道は高清水通り<sup>???</sup>九十八丁とも呼ばれた。」(九十八丁は昔も今もないが、何を根拠にしたのか?)

しかし、**これ以降も2022(R4)6月までの39年間、史跡について調査等何も手を付けていなかった、39年間有るがままになっていた、本書のように全体的・体系的に集約したものは何もなく、案内マップもなかった。**すなわち白いキャンバス同然であった。しかし、調査探求の行動有無は価値観の有り様に係ること、有るがままにして置いたことに是非・善悪を問うものではない。そのような時間的経過は至って自然な推移であった。(同情付度の表現にしておこう！)





## 「高清水通り」史跡に係る従来認識（真実との齟齬）の2事例

### その1

けん え おう  
「懸衣翁」像ではない ⇒ 真実は「祖母神」像なのだ！

左下図は「大黒森プロジェクトの歩みと『ふるさとの宝ガイドブック一覧表、H30.3.23 現在』」（本道地区集会センター所蔵）より拝借したもの。説明文の一部に「・・・一つは姥様（奪衣婆）であり、もうひとつは懸衣翁ではないかともいわれているが、損傷が激しく判別できない。」とある。

なお、同センター内にパネル化したものは、今は掲示から外した。これは、従来、尤もらしく称していた「懸衣翁」像（ジェンダー男・仏教色）ではなく、大沼（私達）の調査で「祖母神」像（ジェンダー女・神道色のもの）であることを判明せしめたからである。

高清水通りの姥様（姥像）



湯殿山神社から月山登山道「高清水通り」のお行様で賑わった。  
この道の33丁目にあたる場所は、標高1000mの稜線にあり、休み場となっていた。ここには、3体の墓石のほか、2体の石像が鎮座しており、一つは姥様（奪衣婆）であり、もう一つは懸衣翁ではないかともいわれているが損傷がひどく判別できない。

ここは、聖と俗、そして女人立入の結界の地であると言われている。

けん え おう  
懸衣翁

右図は全の根拠となった鹿間廣治著「奪衣婆 山形のうば神」（東北企画出版）より拝借したもの。

説明文の一部に「・・・ひょっとしたら、懸衣翁なのでは！ できればそうであって欲しい。」とある。

両方（両書）共に、懸衣翁だと断定した書込みではないが、一般世間（地元）の会話においては断定したかのような通説となつて流布していた、なぜこうなったのか。これは、学識者が書いているから正しいと思い込む錯覚を指す権威バイアス（authority bias）、あるいは、「学識がある」という一点の好印象が、内容全体の正しき評価にまで波及する場合のハロー効果（halo effect）の影響によるものである。授受の双方にある思い込みの典型である。





左図は、前8頁中の9月9日(金)分を抽出したもの。

記事の中に「・・・ 草に埋まる石<sup>①</sup>道標・・・途中『十三丁』とか、『二十六丁』とか彫られた<sup>②</sup>大石が置いてある。この道は清水通り<sup>③</sup>九十八丁とも呼ばれた。・・・」とある。

留意すべく次の3点に着目した。

**一つ目**は、そもそも、『丁』を刻した石は、道標（道案内に供する道しるべ）ではなく、里程標（距離標）の一種である。（まったくの誤りとは言えないが、両者の意味は違うはずだが。）

**二つ目**は、丁石30体の加重平均は、高さ48(Max56)cm×幅28(Max38)cm×厚さ10(Max15)cmの自然石（川原石）である中において、相対比較の問題ではあるが、測らなくとも見た目、社会常識としては“大石”と言うのか？（言わないのではないか！）

**三つ目**は、“九十八丁”とは何を根拠にレクチャーしたのか？ 今となっては九十六丁が丁石終端点（最終丁石）であるものの、もちろん、九十八丁は今もないが、**昔もあろうはずがなかった**のだが。（ましてや、区切りの良い100丁とか、もっともらしい108丁はみな外れた。）

右図は、本道寺口之宮湯殿山神社境内端にある最初の「清水通り」道標だが、以前はこのように傍に説明板があった、その一部を抽出する。「・・・ 95丁目までの町石が設置されている。」とある。（ここでも3点が気になった。）



**一つ目**は“95丁”の『95』とは何を根拠にしたのか？ 確かに、2022(令和4)年の

九十六丁発見までは一つ手前の九十五丁の存在は認められていたが、「まで」との限定的範囲指定の表現、つまり、それが最終の丁石であるという表現に受け止められるが。

**二つ目**は“95丁目まで・・・”とあるが、ここでの丁（石）は起点からの距離地点（ピンポイント）にその印として置くものであり、『丁目』とは社会通念は面的エリアを指すことから、何の意図なのか？

**三つ目**は“町”とはどこから取ったのか？ この現物はみな“丁”であるのだ。距離の意味としては町＝丁でまったくの間違いではないが。

説明板はその後2023(令和5)年5月10日(水)、起点記念碑の位置に移動し、(今は)『96』——5を6に上書き訂正した。

以上のような間違いを正すことが出来たのは、①文政五年建立「起点記念碑」を発見したこと、その後、②「清水まで九十六丁（九十六体の丁石を安置した）ある」という碑文刻字を活字化・解読したこと、そのとおりに③「九十六丁(石)」を地中から発見したことの3点の結合結果である。



“何とか、すっねべ！・・・”

大黒森プロジェクトは外部の有志者の協力をも得て道標設置を行った  
大層な難儀をしたようだ

道標設置について、全7基を「令和2年秋」付けで建立開始、令和3（2021）年に全て設置完了した。



しかし、「九十六丁」石がある  
「高清水小屋」跡地（今は元高清水と称する）に、肝心の道標はない！  
この時期は発見されていないからやむを得ない！



完了した翌年の2022(R4)年6月26日(日)、推奨された大沼が本通りを歩いて、丁石他の史跡の存在に驚愕した⇒“これは何とかすんなね！”



## 丁石探査と全数把握整理の過程

### 1. 従前の地元の姿勢

1983（昭和 58）年から 2022（令和 4）年 6 月までは 39 年も時間があつた、しかし、この間は、確認した丁石でさえも、そこにあつたとしながらも、そのままにしておいた、そのままになっていた、書面化整理しないままそこで止まっていた。

ところが、39 年後の令和 4 年 7 月に T-FMO 渦巻活動が引き金となって大きく展開したのである。

### 2. 丁石発見の経緯記録

- ・大沼が本通りに初めて入った 2022(令和 4) 年 6 月 26 日（日）～調査最終日同年 11 月 26 日（土）までの 5 か月間における、新たな丁石発見の記録は下表のとおり。この間の新規発見の合計数は 10 体となった。
- ・なお、同年最初の発見となった「九十六丁」の前日 9 月 9 日（金）時点で、大沼が丁石 20 体の現存を確認し、整理していた。
- ・神仏靈魂を植え込んだものであり、単なる石ころではないので単位を「体」としている。

地元は、道標設置に動いたものの、目前に現存する丁石でさえも、その総数を正確に抑えていなかった

発見月日 2022(令和 4) 年	発見丁石	発見者（敬称略）	新規発見数
9 月 10 日（土）	九十六丁の 1 体	大沼香（宮林同行）	10 体
10 月 3 日（月）	八十丁、八十五丁、八十七丁の 3 体	布川浩久（阿部剛士同行）	
10 月 9 日（日）	三十四丁、九十四丁の 2 体	大沼香（単独）	
10 月 13 日（木）	七十二丁の 1 体	大沼香（宮林・市原同行）	
10 月 26 日（水）	二十二丁の 1 体	阿部剛士（丁石探査イベント）	
10 月 29 日（土）	十四丁の 1 体	宮林良幸（丁石探査イベント）	
10 月 30 日（日）	十六丁の 1 体	最上さん母娘(丁石探査イベント)	
2023(令和 5)年 11 月末現在		現存総計 30（20+10）体（起点含めて 31 体） （30 体） / （96 体） × 100≒31.3%（判明率）	

各丁石の GPS 位置情報（緯度・経度）と、写真を一覧化している。

それ以降、新しい発見には至らず、2025(令和 7)年 11 月末現在の現存総数は **30（20+10）** 体である。

様々な形式の調査報告の中で、「**新しい内容**」とか、「**発見**」と言う文言を発し、あるいは、記述しているが、書籍本（文献）と現場（現物）の両面において、以下の理由・根拠を踏まえている。したがって、既存書籍本のコピー、盗っ人的横取りや盗犯、既存ネタの焼き鈍しではない。まったくのオリジナルな内容である。これらを秘匿することなく、都度、速やかに公開したことにより、関心ある多くの人達が立ち入り、現場で対面・確認し、SNS に投稿するようになったのである。

## 1) 【書籍本（文献）】の面

出羽三山に関する書籍本やレポートは以下のとおりに数多あり、それらの全文を精読した訳ではないが、私を含め仲間が一通り目を通し、関係者への聞き取りも行った、その上で、それら先行研究の中には記述・記載されていない、登場しない、見逃されて来た、知られて来なかった事柄である、また、地元の郷土史的書籍には一部の名称（地名）は載っているものの具体的史跡のことは皆無同然。もちろん、肝心要の地元西川町史にも書かれていない。いずれにしても空白を埋めた"新発見"とも言える成果である。

### ◇学識者著述本

（山形県内出身者としての戸川安章・岩鼻通明・大川廣海・山内志朗・渡辺幸任の各氏と出羽三山神社、中央での宮家準・久保田展弘・内藤正敏・片山正和の各氏の書籍の一部）

### ◇本エリアの郷土史的書籍として、

①原田一男著「月山登山案内」（山形山岳會・大正九年八月二十日初版発行）

②丸山茂著「神都 岩根澤之面影」（同刊行舎・昭和十五年十二月二十日発行）

③井場英雄著「岩根沢ものがたり」（岩根沢地区公民館・昭和五十一年十一月三日発行）

◇西川町史、周辺関係市町村史     ◇月山マイスター、学芸員、個人研究家・・・のレポート     ◇大黒森プロジェクト資料（従前の地元の認識）など

## 2) 【現場（現物）】の面

- ・私達が現地現場で石造物に初めての対面時、その周囲が雑木と笹竹で覆われて、周辺一帯と同様の藪化になっており、枝の切断、笹竹の刈払いで見える化を図り、現状にしたのは私達である。
- ・史跡周囲の枯れ枝や草木枯葉は長年の経過で汚泥化し、コケも加わり、それが付着して土塗れと為っており、また、極一部は地表に出ていたものの大半が地中に埋まった状態にあり、その存在に気づき、発見し、掘起し、付着泥土を除去し、表面をタオル等で拭い、刻字を浮き上がらせたのは私達である、かつ、刻字を活字化したのは私達である。



設置（安置）されて以来、至近年（昭和以降 100 年）で伐木・掘削したという痕跡は見当らなかった。

史跡（石造文化財）が存置する現場において、そのような作業を踏まえて、世に明らかにしたものである。

本調査内容は仲間の総合的な力の成果である。

(end)